童画家の河目悌二による
「朝と寝る前の歯磨き」を呼びかけるチラシ

## 第３章

# 子どもたちを むし歯から守る

### ～ 学童向け口腔保健活動 ～

第2章で紹介した歯科診療活動と同時期にスタートした学童向けの口腔保健活動。子どもたちに正しい歯みがき習慣を身に付けてもらうため、「学童歯みがき大会」を中心に、日本各地で行われた多彩な活動をご紹介しましょう。

# 児童のむし歯保有率96%

小学校教職員向けの講習会。定員を200名とし、4日間にわたって密度の濃い講習が行われた。

## 小学校教職員向けの講習会も開催

明治以降の急速な食生活の変化で、最も影響を受けたのは子どもたちだった。温かくて柔らかく、甘い食べ物が増えたことで明治後期には、児童のむし歯保有数がなんと96%に達し、重度のむし歯に苦しむ子どもも少なくなかった。「このままでは、むし歯で国が滅びてしまう」。強烈な危機感が、小林商店を児童向けの口腔衛生活動へと駆り立てた。

まず、1913年(大正2年)から始めていた「ライオン講演会」を全国の小中学校へも拡大。子どもたちに歯みがきの大切さをわかりやすく伝えていった。さらに、指導者への教育も必要だと考え、1918年から全国の小学校教職員向けの口腔衛生講習会を東京で開催。地方からの参加を促すため、小林商店が東京までの旅費の半額を負担するという破格の待遇であったため、毎回多数の教職員が参加した。講習会は、関東大震災によって中止された1923年まで毎年行われ、その後の学校歯科の発展に大きく貢献することにもなった。

# 子どもたちに楽しい歯みがき習慣を

## 多彩な付録で魅了する「ライオンコドモハミガキ」

当時のハミガキには大人用の刺激の強い物しかなかったため、小林商店は、歯牙も未完成な幼児に効果的な薬剤を配合し、色や香味も子どもたちの好みに合わせて「ライオンコドモハミガキ」を開発。さらに、子どもたちに、楽しみながら歯磨きの習慣をつけてもらえるようにデザインを工夫し、絵本やしおりなどの付録を付けて1913年（大正2年）に販売開始した。作画は、当時活躍していた日本画の巨匠、鏑木清方（※1）や、子ども向け雑誌などで活躍した童画家、武井武雄（※2）らに依頼。歯みがきへの関心を高めるとともに子どもの情操教育にも役立つと高い評価を得た。

※1 鏑木清方（1878－1972年）
美人画が有名な近代日本画家の巨匠。1954年に文化勲章受賞。

※2 武井武雄（1894－1983年）
「子どもの心にふれる絵」の創造をめざして、童心を巧みに表現した画風で独自の世界観を作り上げた。

# 10年間・2万校・2600万人

## 「歯磨教練」で正しいみがき方を指導

大正時代の「歯磨教練」のようす。1910年代に米国で行われていた“Toothbrush Drill〟と呼ばれる歯みがき指導を手本にしている。

子どもたちに正しい歯みがき方法を覚えてもらうには、実際に練習するのが一番。そんなアイデアから生まれたのが1922年から始まった「歯磨教練」だ。教練という名の通り、小学校などで子どもたち全員が歯ブラシを持ち、号令に合わせて体操のように歯みがきを練習する。当時は、歯のみがき方もまちまちだったので、上・下・縦に使用する正しいみがき方を指導した。

さらに1925年からは「全国学校歯磨教練」と名称を変え、全国的かつ組織的な活動へと拡大。その後も各地で精力的に活動が行われ、1935年までの約10年間に、約2万校の小学校で実施し、参加した児童総数はのべ約2600万人に達した。小学校から寄せられた報告を見ると「自発的に歯をみがくようになった」「歯みがきだけでなく、身辺を清潔にする習慣が身に付いた」「今回の運動をきっかけに校内に歯をみがける洗面所を設けた」などの声が多数あり、「歯磨教練」が、子どもたちの口腔衛生の向上に大きな効果をあげたことがわかる。

# 子どもたちの心を掴むユニークな活動

## ライオン歯磨児童劇団

大正時代から昭和の初めにかけて、小林商店では子どもたちに歯みがきの大切さを理解してもらうためにユニークな企画を立て、全国各地で多彩な啓発活動を展開した。

1924年（大正13年）にはライオン歯磨児童劇団を結成。口腔衛生をテーマにした「歯の国ものがたり」「ライオン・デンタル・レビュー」など、芸術性豊かな演劇を公演。大阪市の天王寺公会堂を皮切りに、東京市（現在の東京都）をはじめ全国各地で数十回の公演を行い、子どもたちにむし歯予防の大切さを伝えた。

「歯磨教練」は幼い頃から歯みがきの習慣を付けるのに役立った。

## 健歯所持者の表彰

また、1926年には関西地区で小学校児童口腔診査会を開催。小学生の歯の診査を行い、優良歯牙の所持者1500人を選抜表彰した。この試みは関係者から高い関心を集め、やがて東京市をはじめ全国各都市で歯科医師を中心とした独自の口腔診査会が行われるようになった。

# 国による初の口腔保健活動

１９３２年、日比谷公園音楽堂で行われた「第１回学童歯磨教練体育大会」。

## むし歯デーと学校歯科医令

日本で初めて、行政による口腔保健活動が行われたのは、「ライオン講演会」から７年後の１９２０年のこと。内務省（現在の総務省、警察庁、国土交通省、厚生労働省）は、当時の児童の三大疾患であった結核、トラホーム、むし歯をテーマにした「児童衛生博覧会」を東京で開催。その中で、11月5日を「むし歯デー」と定め、むし歯予防思想の普及を図るキャンペーンを展開した。小林商店や歯科医師会もこれに積極的に協賛して、街頭でのＰＲ活動やビラ配布を行いキャンペーンを大いに盛り上げた。また、１９３１年には、むし歯予防などを指導する学校歯科医の設置を推奨する「学校歯科医令」が公布されるなど、国も口腔保健活動を積極的に推進するようになった。

その後、「むし歯デー」は、日本歯科医師会が主催し、内務省、文部省（現在の文部科学省）が支援する「むし歯予防デー」（6月4日）となり、地方の行政団体からの支援も広がり、年々規模を拡大していった。小林商店も、毎年「むし歯予防デー」に協賛してさまざまな活動を展開し、例年にも増して盛大な催しとなった１９３２年には、「むし歯予防デー」に合わせる形で「第1回学童歯磨教練体育大会」を東京と大阪で同時開催した。

# 戦時下も続く歯磨教練体育大会

戦時下にもかかわらず後楽園スタジアムに1万人の学童が集った「第9回学童歯磨教練体育大会」

「第1回学童歯磨教練体育大会」は、東京では日比谷公園音楽堂前におよそ30校1万名、大阪では天王寺公園におよそ40校1万5000名の児童が参加。手に手に歯ブラシをもち、号令に合わせて一斉に歯磨教練を行うようすは、さながら華麗なマスゲームのような大迫力となり、大成功となった。その後、日中戦争が始まり、世の中に戦時色が濃くなってきても「学童歯磨教練体育大会」は、毎年継続的に開催された。とくに、1937年（昭和12年）の第6回は、「むし歯予防デー」10周年であったため、戦時下にも関わらず、小林商店・口腔衛生部と、学校歯科医、学校教職員が数ヵ月前から入念な準備を重ね、同年6月5日、東京・隅田公園に学童8000人を集めた整然たる大会を開催した。

また、太平洋戦争開戦の前年である1940年は、紀元2600年と小林商店の創業50周年が重なったため、その記念行事として、東京のほか名古屋市（参加児童数4500人）、静岡市（2600人）、金沢市（1万人）、桑名市（2000人）でも「歯磨教練体育大会」を敢行。東京大会は、後楽園スタジアムにおいて1万人の学童が参加したが、その後、戦局の悪化により12年間中断されることになった。

# 焼け野原からの再出発

空爆により焼失した本社と東京工場。終戦の翌月には50名を新規採用し、再建が始まった。

## GHQによる歯科衛生対策

1945年8月15日、長く悲惨な戦争は、日本全国に深い傷跡を残し、ようやく終わりを告げた。小林商店も本社や各地の営業所、工場を焼失し、多くの海外拠点も失った。小林喜一社長は、一日も早く本来の姿を取り戻すべく、まずは従業員たちをねぎらいをもって迎え入れ、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)の統制による不自由な事業環境の中で再生へ向けた懸命な努力を始めた。

一方、GHQは、戦争によって悪化していた日本の衛生状態の改善に乗り出し、コレラやチフス、結核などと並んで、子どもたちの歯科衛生についても対策を指示。これを受けて文部省は、1946年、都道府県ごとに歯科医師と看護婦による学校巡回班を組織し、全ての学校で全児童の歯科診察を行うという、日本の公衆衛生史上でも最大級の活動を展開した。戦時中は学校歯科医による診察もほとんど行われていなかったため、学校巡回班の活動により、戦後日本の口腔保健活動は息を吹き返すことになった。また、診療の中で、米国から導入されたばかりのフッ化物局所塗布も行われ、その普及に大きな役割を果たした。

# 復興の街に笑顔を届ける

1950～51年にかけて行われた移動動物園。

## 口腔保健活動を人々の憩いの場に

終戦から3年を経て、復興への道筋が見え始めた小林商店は、1949年(昭和24年)、社名を「ライオン歯磨(株)」に一新。新たな成長への決意を内外に示すとともに、自らの使命である口腔保健活動にも再び力を入れ始めた。

暮らしに落ち着きが戻ったとはいえ、娯楽や文化施設の少ない時代。口腔保健活動の専任部署となった文化部の向井喜男部長は、「生活に潤いをもたらし、文化のオアシスになるような口腔保健活動を行いたい」と考え、講演会とともに映画会やレコードコンサート、移動動物園、子どもサンデースクールなど、さまざまな活動を展開し、各地で大盛況となった。移動動物園では、派手な装飾を施したトラック5台に、ライオン、ピューマ、ヒョウ、クマ、サル、鳥類などを乗せて全国を巡回。口腔衛生の啓発を図るとともにサルの曲芸、童話の朗読、歌謡ショー、夜の映画上映など盛りだくさんの内容で人々を魅了した。また、子どもサンデースクールは、各地の教育委員会との後援・共催で、著名人の講演や映画上映会などを開催。どの会場も児童と父母で満員になるほどの盛況となった。

テレビも無かった時代、子どもたちから熱狂的な歓迎を受けた。

## 動く診療所「ライオン・ヘルスカー」登場

1952年4月、東京工場での盛大な披露式で、社員たちの拍手と歓声に包まれたのが戦後の口腔保健活動のシンボルとも言える「ライオン・ヘルスカー」だ。そのデザインは、「ライオン煉歯磨」のデザインを模し、屋上には歯をみがく動物人形を設置したユニークなもの。全長8・3m、幅2・45m、高さ3・1mの大きな車内には、口腔保健活動に用いる展示用のパネルや映写機を備えたほか、児童歯科診療に必要なすべての設備を搭載していた。この「ライオン・ヘルスカー」は各地で大人気を博し、毎日、小・中学校2校を訪問し、講演、診療、映画上映を行うほか、販売店を回って販促活動にも協力。さらに夜は、公園などで野外映写会を開催するというハードスケジュールをこなしていた。スタッフは、まだ舗装もされていないでこぼこ道を走りながら車内で昼食をとる忙しさだったが、「そんな苦労を苦労と思わなかったのは、小・中学校や店頭で、多大な歓迎を受けたから」と、体験者は語っている。「ライオン・ヘルスカー」は3号まで製作され、日本全国を津々浦々まで巡回した。

# 待ちわびた学童歯みがき大会の復活

現在の国立競技場の前身である外苑競技場で復活した学童歯磨訓練大会。従来の名称の「教練」は軍隊用語であることからＧＨＱの指導で「訓練」へと変更された。

## 「第10回学童歯磨訓練大会」

戦争の影響で１９４１年（昭和16年）から中断していたライオン歯磨（株）の「学童歯磨教練体育大会」も、１９５３年、ついに感激の再開を果たした。高らかなファンファーレを合図に代々木の外苑競技場に１万２０００人の児童が華々しく入場行進を行い、スタンドは約２万人の見学児童で埋め尽くされた。そして、楽団の演奏に合わせて全員が歯磨訓練を行う光景が13年振りに蘇った。「歯磨体操」に続いて行われた「レクリエーション」の部では、警視庁音楽隊による吹奏楽演奏をはじめ、米国極東空軍のヘリコプターによる飛行実演が披露されるなど、娯楽の乏しい時代にあって、子どもたちの記憶に残る大会となった。その後も大会は、時代に合わせて内容を変えながら継続し、現在も「学童歯みがき大会」として毎年開催されている。

約１００年前、９割を超えていた児童のむし歯保有率も、２０１４年には、12歳児のむし歯経験歯数の平均が１・００本と大幅に減少。この進歩に「学童歯みがき大会」を中心としたライオンの活動が貢献していることは紛れも無い事実である。

第3章を振り返って

# 快適な暮らしは、毎日の「よい習慣」から。

学童向けの口腔保健活動は、正しい歯みがき習慣の普及が第一のテーマでした。幼い頃から正しい習慣を身に付けることは、将来の健康につながる大切なことです。

歯みがきに限らず、健康で快適な暮らしは、毎日の「よい習慣」の積み重ねから生まれます。「よい習慣」を提案し、定着させることは、健康快適生活産業を標榜する現在のライオンにとっても重大な使命です。先人たちが、工夫を凝らして子どもたちに歯みがき習慣を浸透させたように、ライオンはこれからも、日々努力を重ね、世界の人々の健康で快適な生活習慣づくりに貢献していきます。